様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２０ 日現在

機関番号：４７５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２３０３

研究課題名（和文）明治期における華族と御歌所の文化圏形成に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Formation of the Cultural Sphere of the Kazoku and Outadokoro in the Meiji Period

研究代表者
長福　香菜（CHOFUKU, Kana）

大分県立芸術文化短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：９０６３４９４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：従来明治期の歌壇において存在意義を蔑ろにされてきた旧派の和歌史上における意義を明らかにすべく、特に旧派の枢要な地位を占めていた華族と御歌所歌人によって組織されていた和歌結社「正風社」「興風会」「向陽会」に注目し、その活動の実態を解明した点に本研究の成果がある。その結果、いずれも明治天皇の歌道奨励・振興の叡慮に応えるべく組織され、和歌の継承・発展という役割を担っていたことがうかがえる。また、そこで築かれた人的ネットワークによる旧派文化圏の形成をみることができ、その和歌営為の実態を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
明治期における旧派の実態は、明治後期以降現代に至るまで近世文学・近代文学の両研究領域から十分な調査研究がなされておらず、日本文学研究における空白に該当する。しかしながら本研究を通して、旧派を代表する華族や御歌所歌人による「正風社」「興風会」「向陽会」の活動がいかに精力的に展開され、彼らがいかに和歌を継承してきたのかが知られるとともに、当時の旧派歌壇においては明治天皇の存在が大きく、多大な影響を与えていたことが明らかとなった。このように、旧派の実態解明は研究の空白を埋める作業であり、正当な和歌史を再構築することであると考えている。

研究成果の概要（英文）：As an effort to elucidate the significance of the old school, whose raison d'etre was neglected in Meiji-period poetry circles, in the history of waka poetry, this study focuses on the waka poetry associations Seifusha, Kofukai, and Koyokai, which consisted of noblemen and court poets and occupied important positions in the old school, clarifying their actual activities. As a result, all of them were created in response to Emperor Meiji's encouragement and promotion of the art of waka poetry, and that they played a role in the inheritance and development of waka poetry. We were also able to observe the formation of the old school cultural sphere through the human networks established there as well as clarify the reality of their work with waka poetry.

研究分野：日本近世・近代文学

キーワード：華族　御歌所　旧派　正風社　興風会　向陽会　近世和歌　近代短歌

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来明治期の和歌は新派を中心に語られることが多く、旧派の実態やその存在意義については看過されがちであった。そのため、新派の側に立つ一面的な研究が進む一方で、旧派は近世和歌の連続性として捉えることに終始し、旧態依然とした作歌態度を固持しているとして否定的な見解が採用されてきたと言える。そのため、明治期の歌壇状況を公平に見る視座が不可欠であり、特に旧派による和歌活動の実態解明が必要である。

その大きな手がかりとなるのが、鹿児島県歴史資料センター黎明館に所蔵されている資料「正風社十番歌合」である。この資料をもとに、福井県立図書館寄託松平文庫所蔵「正風社歌会関係資料」や名古屋市蓬左文庫所蔵『正風社歌会之集』といった「正風社」に関する資料を調査したことによって、「正風社」が華族と御歌所によって組織されていた和歌結社であったことが明らかとなった。このことから、華族と御歌所には人的ネットワークが築かれ、旧派の文化圏が形成されていたと考えられる。よって、明治期における華族と御歌所の文化圏形成の実態解明が正当な近代短歌史を再構築することに繋がると考え、本研究を申請した。

２．研究の目的

鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵「正風社十番歌合」（巻子本 2 軸「十番歌合新樹巻」「十番歌合首夏巻」、歌合は明治 23 年頃から同 33 年にかけて実施されたと推定）をはじめ、福井県立図書館寄託松平文庫蔵「正風社歌会関係資料」（計 16 点、明治 6 年 12 月 14 日～同 10 年 7 月 21 日までの 15 回、年不明 1 回の歌会が記録）、名古屋市蓬左文庫蔵『正風社歌会之集』（1 冊、明治 7 年 9 月 21 日～同 9 年 12 月 16 日までの 16 回の歌会が記録）を調査した結果、「正風社」は華族を中心とした集団によって組織され、加えてそこに御歌所歌人が参加して成り立っていたと言える。また、その活動は明治初年から同 30 年頃までは継続していたと考えられる。

江戸から明治へ時代の移行を経てもなお旧公家や旧大名家の当主らが一堂に会して歌会を行うという和歌の営みが行われていたことを、これらの資料が裏付ける。つまり、時代の変化とは無関係に連綿と受け継がれてきた「歌を詠む」という行為が、当時の華族にとってなお精神生活の主要な部分を占めていたのではないかと推察される。

よって本研究では、「正風社」の実態を解明することによって、華族と御歌所による文化圏がいかに形成されていたのか、そして明治期の和歌史上における旧派の意義について明らかにすることを目的とする。さらに、明治 18 年には東京華族による興風会が、同 21 年には京都華族による向陽会がそれぞれ設立されている。ともに設立の背景には明治天皇による歌道奨励がある。これらの和歌結社と「正風社」との関係性の解明にも繋げていきたい。

３．研究の方法

（１）平成 30 年度

初年度は「正風社」の資料調査と収集を研究の中心に掲げた。また、「正風社」に限らず、華族と御歌所の和歌活動に関する様々な資料も調査対象として本研究の一環に位置づけ、整理をおこなうことに主眼を置いた。資料調査の結果、福羽美静文庫『明治 4 年正月御歌会留』（学習院大学蔵）、陸奥国弘前津軽家文書『正風社歌会始 1～12』（国文学研究資料館蔵）の所在が明らかとなった。また、華族と御歌所の和歌活動の実態がうかがえる資料として『御歌所寄人阪正臣氏談話速記』（以下『談話速記』と略す）が宮内庁宮内公文書館に 3 冊、巻菱湖記念時代館に 1 冊所蔵されていることが確認できた。さらに、宮内庁宮内公文書館蔵『御歌所日記』や『談話速記』などの資料を調査し、東京華族による「興風会」と京都華族による「向陽会」の実態について検討をおこなうとともに、その成果を学会で発表した。

（２）令和元年度

当該年度は、引き続き「正風社」をはじめ華族と御歌所の和歌活動に関する資料調査と収集に従事するとともに、福羽美静文庫『明治 4 年正月御歌会留』（学習院大学蔵）、奥国弘前津軽家文書『正風社歌会始 1～12』（国文学研究資料館蔵）の資料収集や整理、分析に着手した。また、4 冊存する『談話速記』諸本の関係性と阪正臣自筆の校正箇所について考察をおこなった。さらに、前年度におこなった「興風会」と「向陽会」に関する学会発表の内容を論考化し、公表した。

（３）令和 2 年度

前年度に引き続き資料調査と収集に注力したが、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、予定していた実地調査による原本の閲覧が叶わなかった。そのため、インターネット上で公開されている陸奥国弘前津軽家文書『正風社歌会始 1～12』（国文学研究資料館蔵）のデジタル画像の整理や分析を優先させ、特に歌会の開催日や会場、催主、兼題・当座、出詠者などのデータをまとめる作業に取りかかった。また、前年度に検討をおこなった『談話速記』諸本の関係性と阪正臣自筆の校正箇所について、その成果を論考化し公表した。

当該年度は研究計画最終年度であったが、上記の理由から大幅な研究の遅延が生じたため、補助事業期間の延長を申請することとなった。

（４）令和３年度
　前年度に引き続き最終年度となる今年度も新型コロナウイルス感染拡大によって、予定していた資料調査が遂行できず、原本の閲覧のみならず、新たな資料の収集がおこなえなかったため、これまでに収集した資料の整理や分析、検討をおこなった。前年度より着手した陸奥国弘前津軽家文書『正風社歌会始 1～12』（国文学研究資料館蔵）のデジタル画像の整理と分析をおこない、歌会の開催日や会場、催主、兼題・当座、出詠者などのデータを引き続きまとめるとともに、収集済みの資料らとあわせて「正風社」の歌会や運営、人的交流の実態などを総合的に検討する作業をおこなった。

４．研究成果
　従来明治期の歌壇において存在意義を蔑ろにされてきた旧派の和歌史上における意義を明らかにすべく、特に旧派の枢要な地位を占めていた華族と御歌所歌人によって組織されていた和歌結社「正風社」「興風会」「向陽会」に注目し、その活動の実態を解明した点に本研究の成果がある。その結果、いずれも明治天皇の歌道奨励・振興の叡慮に応えるべく組織され、和歌の継承・発展という役割を担っていたことがうかがえる。また、そこで築かれた人的ネットワークによる旧派文化圏の形成をみることができ、その和歌営為の実態を明らかにすることができた。以下、研究成果を（１）～（４）にわけて概観する。

（１）正風社
　新たに下記資料の所在が明らかとなり、調査や分析をおこなった。
・福羽美静文庫『明治四年正月御歌会留』（学習院大学図書館蔵）
　→明治６年「四月十日」と「明治七年四月十日」の「正風社」歌会の記録を収める。
・陸奥国弘前津軽家文書『正風社歌会始 1～12』（国文学研究資料館蔵）
　→明治 10 年から同 43 年までの「正風社」歌会の記録を収める。
　新たな資料に調査済みの資料を加えて、「正風社」の歌会や運営、人的交流の実態を総合的に検討した結果、「正風社」が明治６年には設立しており、明治 43 年までは存続していたことが明らかとなった。歌会は概ね 2～7 月、10・11 月に月１回の頻度で実施されていたことや、華族を中心とした集団によって組織され、そこに御歌所歌人などが介入して成り立っていたこと、また歌会会場として催主の邸宅が提供され、かつ持ち回りで担当していたこと、「正風社」の歌会が「正風会」や「正風歌会」などとも称されていたことなどが明らかとなった。また、『談話速記』において、御歌所寄人などを務めた阪正臣が麝香間祗候によって組織されていた歌会を「正風社」と言及していることも確認できた。「興風会」「向陽会」同様に、明治天皇の歌道奨励を受けて「正風社」は設立され、華族には和歌の継承と発展が期待されていたと考えられる。

（２）興風会
　明治 18 年３月に設立されたが、その背景には歌道に専心し奨励をおこなう明治天皇の姿があった。しかしながら設立は天皇の指示ではなく、東京華族が歌道修業や研究を意図して自発的に結成したものである。月次歌会や臨時会には御歌所歌人が出席して詠進をおこなったり、指導や運営を担ったりするなど「興風会」活動を支えており、御歌所の果たしていた役割は大きかったと言える。また、臨時会開催時には天皇から勅題や食事の下賜があり、詠進歌は叡覧に供していた。

（３）向陽会
　歌道の廃絶を憂え、継承を願う明治天皇の意向によって、明治 21 年４月に京都華族によって設立された。しかし、明治 10 年にはすでに設立の叡慮があり、同 12 年には歌会が実施されていたことから、その時期には「向陽会」の前身は存在していた。山本実政や宇田淵によって運営され、御歌所歌人も指導のために派遣されていた。天皇たっての設立とあり、多く御手元金が下賜され、京都華族の歌道研鑽を支援していた。

（４）『談話速記』諸本の関係性と阪正臣自筆の校正
　正臣は明治 20 年から御歌所に勤務した御歌所歌人であり、『談話速記』は『明治天皇紀』編修にあたって宮内省臨時帝室編修局が正臣に聴取した談話の記録である。『談話速記』は、管見の限り宮内庁宮内公文書館蔵の３冊（A～C 本）と巻菱湖記念時代館蔵の１冊、計４冊が存する。A 本は手稿本であり、朱筆や鉛筆による加筆や修正が散見されるのに対し、B・C 本はタイプ版であり、A 本の書き入れが概ね反映されているが、さらに朱墨による手書きの校正が施されている。巻菱湖記念時代館本は B・C 本と同じくタイプ版であるとともに、朱墨による手書きの校正も含め同様の内容を持つが、B・C 本には見られない朱書きによる加筆・修正が正臣の手によって新たに施されているという点に特徴がある。校正箇所はいくつか確認できるが、特に２箇所を取り上げて考察をおこない、正臣の校正意図について言及した。明治天皇の歌道や御歌所による御製拝見、歌会始など関する様々な証言を収録する『談話速記』は当時の宮中歌壇を知るうえで貴重な資料と言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 長福香菜	４．巻 第69巻9号
２．論文標題 『御歌所寄人阪正臣氏談話速記』を読む	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本文学	６．最初と最後の頁 38～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長福香菜	４．巻 6
２．論文標題 明治期における華族と御歌所の和歌活動 ―「興風会」・「向陽会」に着目して―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 西日本国語国文学	６．最初と最後の頁 29～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 長福香菜
２．発表標題 鹿児島の女流歌人―税所敦子―
３．学会等名 2019年度志學館大学・かごしま県民大学連携講座「我、ここにあり。～鹿児島ゆかりの女流歌人・作家～」
４．発表年 2019年

１．発表者名 長福香菜
２．発表標題 和歌と短歌の近代
３．学会等名 令和元年度大分県大学図書館協議会総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 長福香菜
２．発表標題 明治期における華族と御歌所による和歌活動 ―「向陽会」・「興風会」を中心に―
３．学会等名 第68回西日本国語国文学会　大分大会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関